

# 青森市朝日山(2)遺跡の土坑墓について

中 嶋 友 文

## 1 はじめに

青森市に所在する朝日山(2)遺跡は県道青森浪岡線道路改良事業に伴い、1999～2003年に当センターによって発掘調査が実施され、平安時代の集落跡と縄文時代の墓域などが検出された。5年間の調査面積は約20,000㎡であるが、道路の改良事業のため調査区は東西に細長く、部分的に道路によって分断されているため、工事計画及び買収状況などにより断片的な発掘調査となり、調査区全体を把握できないままに部分的な報告書が刊行された。(青森県教育委員会：2001, 2002, 2003, 2004b)そこで、報告書で触れられなかった諸点の中から、縄文時代晩期の土坑墓について若干の検討を加えてみたい。

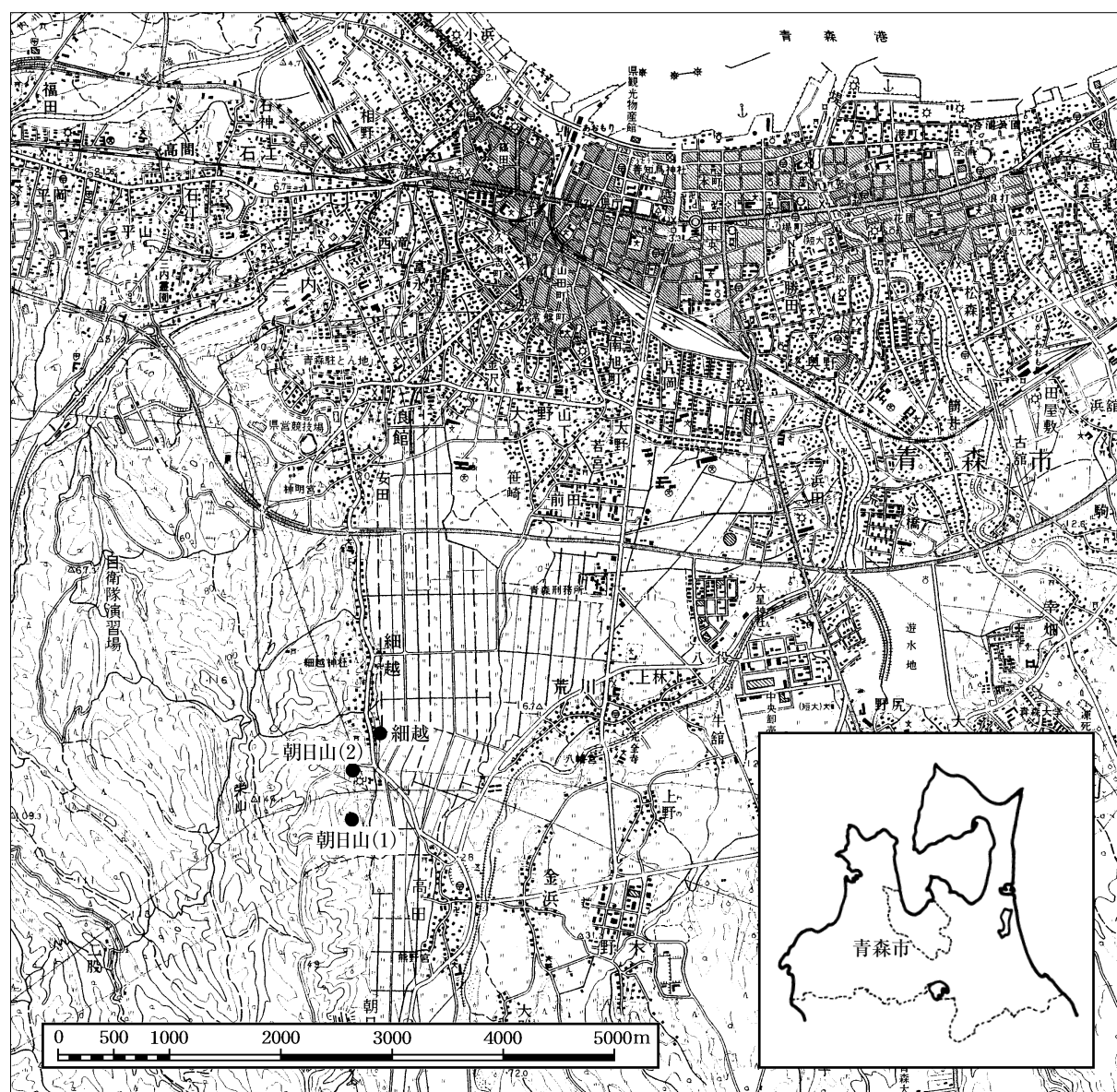


図1 遺跡位置図

## 2 遺跡の概要（図１）

本遺跡は、青森市南西部の中位段丘上に位置し、地形は北西から南東にかけて緩やかに傾斜し、その標高は約25～55mである。周辺には縄文時代晩期の細越遺跡などが近接する。現況は、おもに畑地や植林された杉林として利用されており、それらに伴うと思われる盛り土や削平された区域が随所に見られる。

遺跡は平安時代と縄文時代の複合遺跡で、調査区のほぼ全域に平安時代の遺構がみられる。縄文時代の遺構は、調査区南側をほぼ西から東に向かって蛇行する沢に沿った北側の緩斜面に中期後半の遺構、その東側の削平された平坦面に晩期前半の遺構がそれぞれまとまって検出されている。

5年間におよぶ調査の総面積が約20,000㎡で、検出遺構は、縄文時代の竪穴住居跡5軒、土坑（含土坑墓）160基、溝状土坑（落とし穴）8基のほか、平安時代の竪穴住居跡160軒（含竪穴遺構16軒）、土坑205基（含焼成遺構22基・井戸跡6基）、溝跡31条（含外周溝23条）、掘立柱建物跡7棟、畠跡などである。出土遺物は、段ボール箱で約520箱を数え、代表的な遺物としては、縄文時代晩期の藍胎漆器と奈良時代の唐式鏡『伯牙彈琴鏡』があげられる。特に『伯牙彈琴鏡』は東北地方以北では初めての出土例として注目された。

## 3 土坑墓について

本遺跡で検出された縄文時代晩期と思われる土坑墓の総数は75基である。本稿では、漆製品が出土した24基の土坑墓を中心として、平成4年度に発掘調査が行われ、本遺跡と沢を隔てて隣接する朝日山（１）遺跡（青森県教育委員会：1992, 1993）と比較検討をしてみる（註1）。

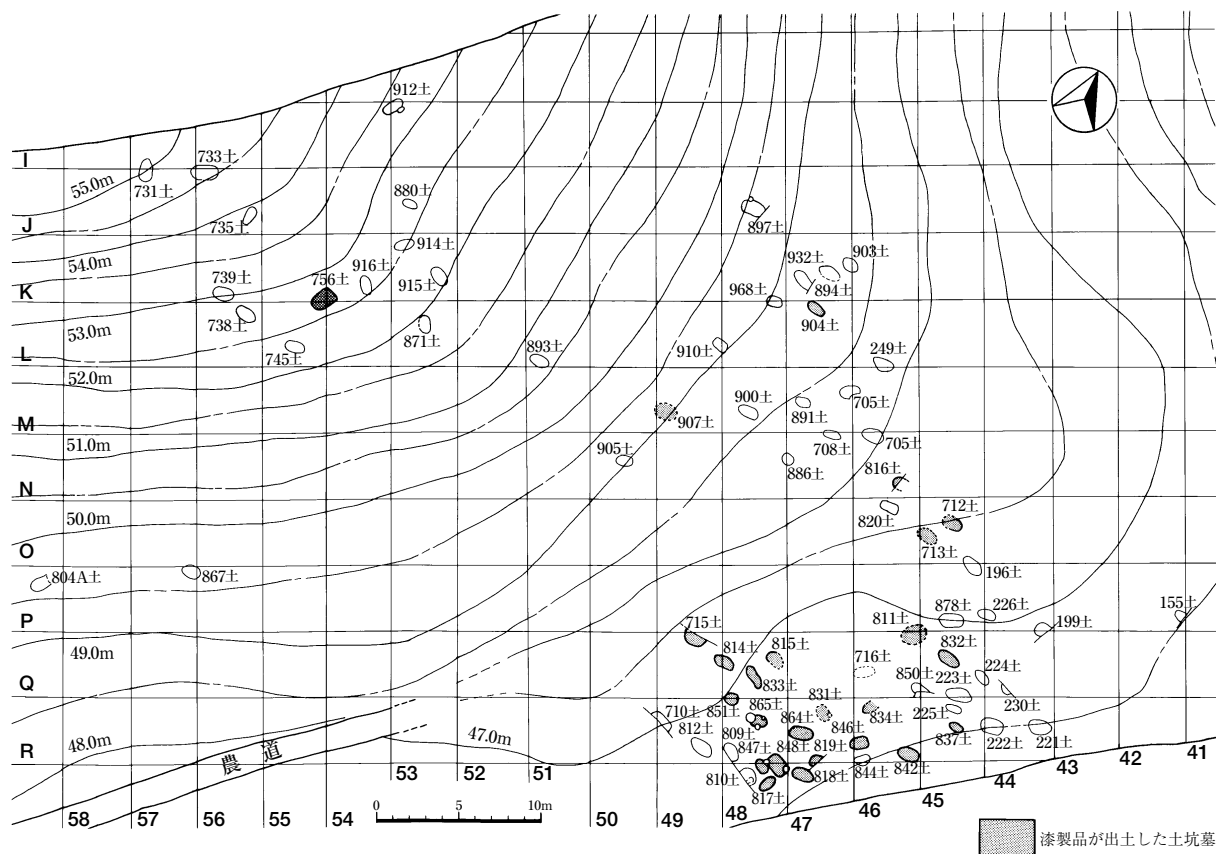


図2 土坑墓配置図

ただし、調査区南側の緩斜面に縄文時代中期末の土坑墓と思われる円形の土坑(註2)も存在するが、本稿で対象としたものは縄文晩期と推定される楕円形の土坑墓に限定したことを断っておきたい。

#### [分布状況](図2)

土坑墓は、調査区中央部の平坦面から西側の緩斜面(標高約46~49m)にかけて分布し、特に中央部の平坦面に集中して検出されたが、その配置等に関しては、なんらかの規則性などを見出すことができなかった。しかし、漆製品が出土した土坑墓は狭い範囲にある程度のまとまりをもち、ベンガラ(赤色顔料)の散布されている土坑墓は西側の斜面に偏る傾向がみられるなど、考え方によってはいくつかのグループに分けられる可能性がある(註3)。また、重複している土坑墓が見られないことから考えて、その分布や配置については、何らかの制約があったと思われる。朝日山(1)遺跡では、丘陵東側の斜面(標高約50~70m)を中心として広範囲に分布し、その長軸方向から尾根に沿っていくつかのグループに分かれている。両遺跡ともに東側斜面につくられ、列状や環状のような特別な配置は見られない状況である。

#### [平面形・規模](図3)

土坑墓の平面形はほとんどが楕円形で、それらの規模は長軸が130cm前後、短軸が75cm前後に集中する。長軸の最大が第811号土坑(註4)の約160cm、最小は第837号土坑と第851号土坑の約90cmである。短軸は最大が第811号土坑の約110cm、最小は第847号土坑の約50cmである。土坑墓の長軸と短軸の割合は2:1~3:2の中に収まり、朝日山(1)遺跡の3:1~3:2に比べるとその範囲は狭く、規格が同一の形態のものが多くという特徴がみられる。また、埋葬姿勢については、その規模から考えて屈葬が大半を占めるものと思われる。

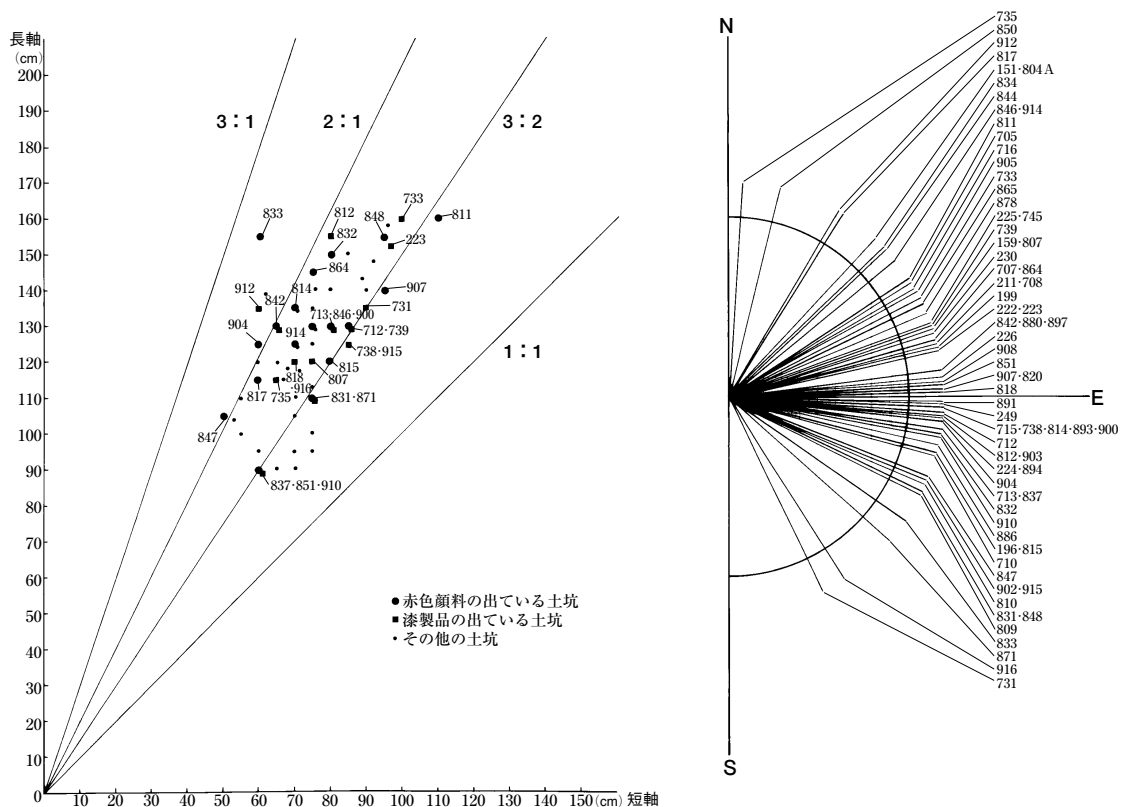


図3 土坑墓の規模と長軸方向

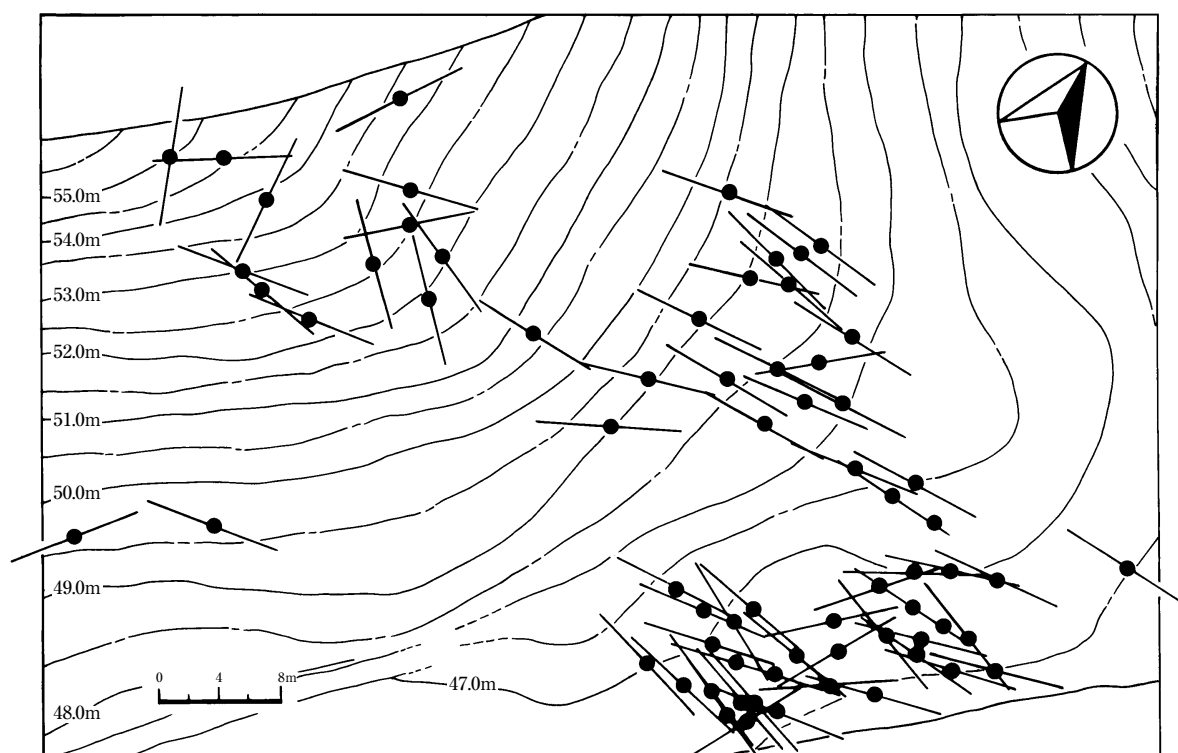


図４ 土坑墓の長軸方向

#### 〔斜面の傾斜角と長軸方位〕（図４）

調査区は造成や重複する遺構によって上部が削平されている土坑墓が大半を占めるため、残存部分（傾斜角６～７度）だけで判断はできないが、西から東にかけて緩やかに傾斜していたと思われる。土坑墓の長軸方向は、ほとんどが $N-50^{\circ}-E \sim N-120^{\circ}-E$ の範囲に収まり、その軸方向は等高線に対して平行するものより、むしろ直交するものが多い。そのことは、地形よりもその軸方向についてのなんらかの規則性が重要視された可能性が考えられる。朝日山（１）遺跡では傾斜角６～１６度のやや急な斜面につくられ、その長軸方向が、いくつかのグループにまとまりをもち、それらが東西方向に集中している。この状況は、朝日山（２）遺跡と同様に地形の制約を受けずに構築されていると推定できる。

#### 〔頭位方向〕

頭骸骨などの人骨が出土していないため、頭位方向が断定できる土坑墓はなかった。しかし、出土遺物の中には、藍胎漆器や耳飾り、ヒスイ製の玉類などある程度頭位方向を推定できるものがある。それぞれの出土状況から、藍胎漆器は頭位に被せられているものであり、耳飾りは耳に、首飾りやヒスイ製の玉類は首にそれぞれ着けていたとすれば、それらが出土した位置がおおよそその頭部と考えられる。さらに、リング状の漆製品（耳飾り？）から顔の方向と体前面の方向が推測でき、第７１３号土坑は横向き（側臥）、第８１８号土坑では上向き（仰臥）と考えられるが、その埋葬様式に統一性を求めることはできない。また、ベンガラが検出された土坑墓は、その範囲から頭部を推定できるが、ベンガラが両端だけではなく中央部付近に散在する土坑墓も存在することから、範囲だけで頭部と断定することはできない。しかし、一般的に頭部にベンガラが散布されていることから、６３％が東頭位と考えられる。朝日山（１）遺跡も同様にベンガラが検出された土坑墓の約６割が東頭位である。



### 【上部構造】

ほとんどの土坑墓は削平されているため上部構造について不明であるが、すべての土坑墓が同一時期に作られたとは考えられず、重複が確認できないことから埋葬後その上部に何らかの方法を用いて、位置を明示していたと思われる。朝日山(1)遺跡では上部にマウンド状の盛り土がみられるものや墓標と考えられる礫(ベンガラが付着していた石皿)が検出されている。



土坑墓群(南から)

### 【堆積土】

漆製品が出土した土坑墓は、残存する掘り込み部分が僅かなため堆積土に関して特徴的なことは確認できなかったが、暗褐色から黒褐色の土色で炭化物や細礫を含み、その状況から人為堆積と考えられる。朝日山(1)遺跡では、上部層に砂質土や小礫が混入して堆積しているものがみられ、それらは、マウンド状の盛り土部分の残存であると考えられる。

### 【壁面】

堆積土と同様に残存する掘り込み部分が僅かなため壁面に関しても特徴的なことは確認できなかったが、比較的深い掘り込みを持つ第842号土坑の壁面は、ほぼ垂直につくられている。朝日山(1)遺跡では、壁面に階段状の段差がみられるものや内側に挟り込むものがみられる。

### 【底面】

土坑墓の底面はすべてがほぼ平坦であり、漆製品は出土していないものの底面の両端に溝をもつ土坑が1基確認されている(註5)。朝日山(1)遺跡では坑底面が平坦な土坑墓は90%、底面に溝をもつものは8基検出されている。

### 【出土遺物】(図5)

土坑墓から出土した遺物は、大部分が漆製品やヒスイ製の玉類で、僅かに土器や石器がみられる。検出した土坑墓数からみて、ヒスイ製の玉類の出土率は約13%、漆製品の割合は約32%となり、いずれも高い数値を示している。また、ベンガラの散布されている土坑墓からは藍胎漆器などの漆製品が出土していないが、ヒスイ製の玉類はベンガラや漆製品の有無に関係なく出土していることは興味深いことである。

漆製品のほとんどが土坑墓の底面からで、その状況から副葬品や装身具と考えられ、形状から大きく藍胎漆器、紐状漆製品、リング状(マカロニ状)漆製品の3つに分けられる。一般に藍胎漆器はカゴを母体として漆で塗り固めた漆器で、縄文晩期に多くの類例をみることができ、皿、鉢、壺などの種類がある。カゴの材料としては、タケなど材を細く削ったもので、鉢の場合、一般的には、底部が網代編み、

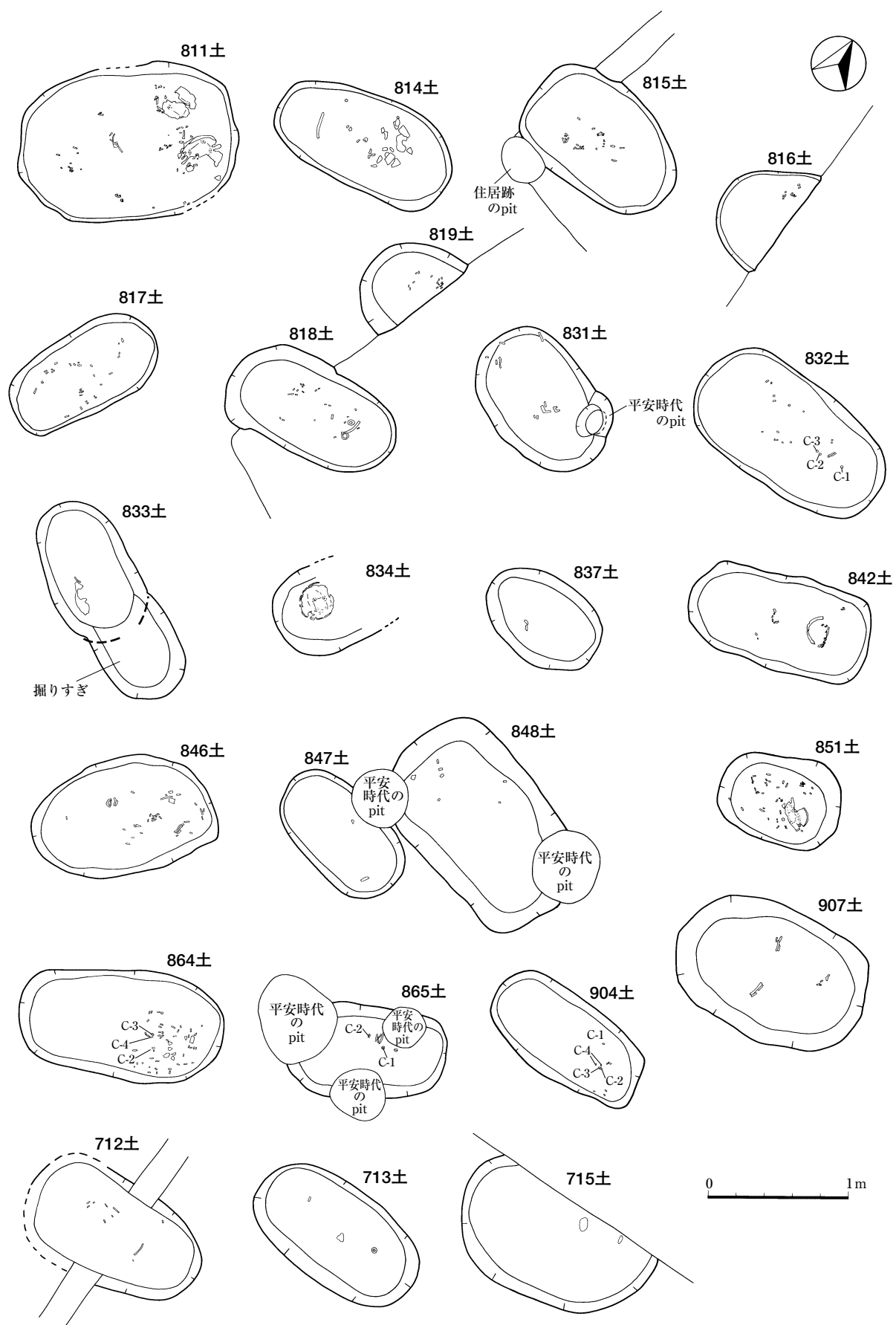


図5 漆製品が出土した土坑墓

胴部はザル編みにしており、底部の四隅が張り出している。保存処理を施した3点の藍胎漆器は、残存部分から推測して口径20～26cm、器高4～5.5cm、底径9～15cmで鉢と思われる。いずれも藍胎漆器の胎部分が残存していないためどのような材を用いてつくられたかは不明であるが、遺物を観察する限り太さが2～3mmという極めて細い材で編み込まれていることが言える(註6)。紐状漆製品は1～2mmの細い紐を2～3本束ねたもので、これがヒスイ製の玉類の孔を通っている。中には10本以上を束ねて環状につなげたものや十数本が交差しているものもみられる。多くは2～3cmの長さで散在し、その原形をとどめていない。それらの出土位置から首飾りや腰飾りの紐と推測される。調査では、衣類と思われるものは検出されなかったが、土坑墓の底面に散在する紐状漆製品が服の装飾に用いられている可能性も十分考えられる。しかし、本来漆は硬化するもので紐として結んだり、解いたりできるのかはどうかは疑問である(註7)。リング状(マカロニ状)漆製品も、その胎部は残存していないが、一部の漆膜からその形状が湾曲しているものを一括し、その出土位置から耳飾りや腕輪と考えられる。

藍胎漆器と思われる漆製品が出土している遺跡は、県内では縄文時代晩期の7遺跡(註8)にすぎず、ほとんどが沢地や泥炭層から出土で、遺構内(土坑墓)から確認できたものは朝日山(2)遺跡と浪岡町平野遺跡である。両遺跡ともに標高が約40～80mの丘陵上に位置し、漆膜が残存できる条件があったとは思われない。ただ、朝日山(2)遺跡では雨が降らない時でも土壌がやや湿った状態で、地下水が伏流していることと平安時代の竪穴住居跡の粘土質の貼床に覆われていたことが、残存していたことに結びつく可能性がある。しかし、硬化した漆膜自体は、耐久性や耐薬品性(酸やアルカリに強い)が優れていることから考えれば、基となる胎部分がすでになくなっている、土中に残存しているのが当然なのかも知れない。いずれにしても出土した藍胎漆器を含む漆製品は、当時の埋葬方法を考える上で貴重な資料といえる(註9)。

朝日山(1)遺跡の土坑墓からは、漆製品が出土していないものの、ヒスイ製の玉類や石鏃、土製品、石製品などの副葬品や装着品が確認され、その出土率は10%程度である。

#### [時期]

土坑墓の時期については、第710号土坑や第715号土坑の出土土器から、晩期中葉の大洞C<sub>1</sub>～C<sub>2</sub>式と考えられるが、すべての土坑墓がその時期とは考えられない。同様に朝日山(1)遺跡でも、出土遺物からおおよそ大洞B・BC～C<sub>1</sub>・C<sub>2</sub>の時期と推定されるが、定かではない。どちらも埋葬された集団の竪穴住居跡(集落)(註10)などが確認されていないことと土坑墓からの出土遺物が少ないため、単純に遺跡から出土した土器からみれば、両遺跡の間には若干の時期差が考えられる。

## 4 まとめ

朝日山(2)遺跡の土坑墓群は、丘陵の東側部分にある程度のまとまりをみせ、装着品には漆製品を多用している。残念ながらその集団の集落(竪穴住居跡)などは確認されていないため、出土した漆製品が遺跡周辺で製作されたものか搬入品なのかは不明である。だが、その漆を採取し製品を完成させるまでの技術を考慮すれば、埋葬された集団は特別技術を持っているか、あるいは漆製品を手に入れることのできる集団の可能性が高く一般の集団とは考え難い。

また、装身具として種々の漆製品が出土したことから、精査の際、縦櫛が出土する可能性を前提として調査したが、調査区内の土坑墓からの検出されなかった。しかし、200mほど離れた東北新幹線工

事区域の第220号土坑墓から赤漆塗りの縦櫛が1点出土した(青森県教育委員会：2004a)。このことは、漆塗りの縦櫛自体が遺跡内に存在しないのではなく、調査区内の土坑墓に副葬あるいは装着されなかったか、あるいは埋葬された時期や集団が違ったためなのかも知れない(註11)。

埋葬姿勢については、土坑墓の形態からほとんどが屈葬と推定され、その幅の狭さからかなり強い屈曲の姿勢と考えられる。出土した漆製品から仰臥や側臥があることが想定でき、頭位方向は大半が東頭位で斜面に対することこだわりを持っていないようである。以上のことから、埋葬された集団が、居住区と埋葬区を設定し、埋葬を計画的に行い、管理していたと思われる。

本遺跡と朝日山（１）遺跡は、直線距離にして約300mほど離れているが、土坑墓の形態などから明確な違いを見つけることができなかった。唯一、副葬や装着される遺物に差異がみられ、それが時期(時間)的な差、あるいは、集団における葬制の違いと思われる(註12)。

また、今回、合葬墓が検出されたが、埋葬された人物がどのような関係なのかは不明であり、漆製品を装身具として多用していることを含めて今後の研究テーマとしたい。

最後に本稿をまとめるにあたり、恵庭市教育委員会の上屋真一氏・佐藤幾子氏、(財)北海道埋蔵文化財センターの小林正人氏、平安学園の本吉恵理子氏、当センターの福田友之氏・三浦圭介氏には種々ご教示いただき、この場を借りて感謝申し上げたい。

註1 場所によっては土坑墓自体が、重複する平安時代の遺構によって完全に削平されてしまった可能性も考えられるが、あくまで検出した土坑墓を対象とする。

註2 人骨などが出土せず埋葬された痕跡を認めることができなかったため、土坑墓とは断定することは難しいが、その遺物などの出土状況から土坑墓の可能性が考えられる土坑。

註3 調査区の南側に隣接する畠を耕作している人の話では、漆製品と思われる赤い破片が確認されており、漆製品が出土する土坑墓の範囲は南側に広がる可能性が考えられる。

註4 第811号土坑は、藍胎漆器2点のほか、ヒスイ製の玉類や紐状の漆製品が出土し、その状況から2体同時に埋葬された合葬墓と考えられ、他の土坑に比べ規模的が大きい。八戸市八幡遺跡の第13号土坑墓も長軸170cm、短軸135cmと大きく、成人男女が屈葬状態で合葬されている。

註5 調査では、第736号土坑墓が底面に溝が確認され、木枠と考えられるコの字状の炭化材を放射性炭素年代測定した結果、およそ2900～3000年前と報告された。また、土坑墓と形態や軸方向などが晩期のものと違うことから考えて、縄文晩期以前の土坑墓とし、現時点では晩期の土坑墓からは除外した。

註6 八戸市是川遺跡で出土した藍胎漆器の胎部分の樹種はトチノキとノリウツギである(八戸市教育委員会：2002)。

註7 紐状漆製品を、六ヶ所村上尾駮(1)遺跡C地区では、帯状赤色顔料としてハチマキ(ヘアーバンド)と呼称しているが、本遺跡ではその出土位置からハチマキとは考えられず首飾りや腰紐としている。

註8 八戸市是川中居遺跡、木造町(現つがる市)亀ヶ岡遺跡、板柳町土井I号遺跡、尾上町八幡崎遺跡、浪岡町平野遺跡、平賀町石郷遺跡、青森市朝日山(2)遺跡の7遺跡である。(平成15年11月現在)

註9 比較的残存状態の良かった藍胎漆品3点、首飾り(紐状漆製品)1点、耳飾り(リング状漆製品)1点を保存処理したが、やはり出土直後の色合いとは違ってしまった。それは、漆に混入する朱やベンガラの量などによって微妙に違うことや何層にも塗り重ねしているなど、出土した漆製品が一樣な色合ではなかったため、出土した時に共通した色調の認識が必要である。例えば『日本の伝統色 第7版』(大日本インキ化学)などを用いて記録しておくことも一つの方法といえる。

註10 朝日山(2)遺跡で、検出された縄文時代の縦穴住居跡の5軒は、いずれも中期後半と考えられる。

註11 土坑墓間の距離が約200mの離れていることから、同一の墓域とは考えがたい。六ヶ所村上尾駮(1)遺跡C地区でも紐状漆製品が出土した土坑墓群と縦櫛が出土している土坑墓群とは約30m離れており、その形態などから同一のグループとは考えられない。

註12 縄文時代晩期の浪岡町源常平遺跡(大洞B・A式?)、六ヶ所村上尾駮(1)遺跡C地区(大洞C<sub>1</sub>～C<sub>2</sub>式)、北海道木古内町札刈遺跡(大洞C<sub>2</sub>式)でも、土坑墓の形態などにあまり差異が認められないが、副葬や装着された遺物の違いが時期差や地域差、あるいは集団における葬制の差と考えられ、僅か300mほどの離れた区域でも考えられないことではないと思われる。

## 《引用・参考文献》

- 青森県教育委員会 1978 『源常平遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第39集  
 青森県教育委員会 1979 『細越遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第49集  
 青森県教育委員会 1987 『上尾駁(1)遺跡C地区発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書第113集  
 青森県教育委員会 1992 『朝日山遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第152集  
 青森県教育委員会 1993 『朝日山遺跡Ⅲ(第1分冊)』青森県埋蔵文化財調査報告書第156集  
 青森県教育委員会 2001 『朝日山(2)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第298集  
 青森県教育委員会 2002 『朝日山(2)遺跡Ⅴ』青森県埋蔵文化財調査報告書第325集  
 青森県教育委員会 2003 『朝日山(2)遺跡Ⅶ』青森県埋蔵文化財調査報告書第350集  
 青森県教育委員会 2004a 『朝日山(2)遺跡Ⅷ』青森県埋蔵文化財調査報告書第368集  
 青森県教育委員会 2004b 『朝日山(2)遺跡Ⅸ』青森県埋蔵文化財調査報告書第369集  
 青森県立郷土館 1984 『亀ヶ岡石器時代遺跡』青森県立郷土館調査報告第17集・考古-6  
 青森県立郷土館 1993 『漆の美-日本の漆文化と青森県-開館20周年記念特別展図録』  
 板柳町教育委員会 1993 『土井I号遺跡』  
 岡村 道雄 1990 「埋葬状態からみた縄文人のアクセサリ-」『月刊文化財』11月号 第一法規出版  
 葛西 勲 1983 「縄文時代中期、後期、晩期(葬制の変遷)」『青森県の考古学』青森大学出版局  
 工藤 正 1979 『青森県尾上町八幡崎・李平遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書』尾上町教育委員会  
 瀬川 拓郎 1983 「縄文後期～続縄文期墓制論ノート」『北海道考古学』第19輯  
 浪岡町教育委員会 2002 「平野遺跡発掘調査報告書」『平成13年度浪岡町文化財紀要』Ⅱ  
 成田 滋彦 1979 「亀ヶ岡文化圏の葬制の諸問題(1)」『考古風土記』第4号  
 成田 滋彦 1980 「亀ヶ岡文化圏の葬制の諸問題(2)」『考古風土記』第5号  
 八戸市教育委員会 1988 『八幡遺跡』八戸市埋蔵文化財調査報告書第26集  
 八戸市教育委員会 2002 『是川中居遺跡1』八戸市埋蔵文化財調査報告書第91集  
 藤本 強 1995 「墓制成立の背景」『縄文文化の研究9 縄文人の精神文化』雄山閣出版  
 南北海道考古学情報交換会 1999 『北日本における縄文時代の墓制 資料集』  
 保坂 三郎 1972 『是川遺跡』中央公論美術出版  
 北海道開拓記念館 1973 『札幌遺跡』  
 山岸 良二 1991 『原始・古代日本の墓制』同成社  
 山田 康弘 2001a 「縄文人の埋葬姿勢(上)」『古代文化』第53巻第11号  
 山田 康弘 2001b 「縄文人の埋葬姿勢(下)」『古代文化』第53巻第12号

## 土坑墓一覽表

土坑番号	位 置	形 態	規 模 (cm)			長 軸 方 位	備 考
			長軸	短軸	深さ		
SK-151	P-38・39	橢円形	140	76	19	N-43°-E	
SK-155	O-40	不明	—	59	10	—	
SK-159	P-35	橢円形	139	62	42	N-72°-E	
SK-196	O-44	橢円形	143	89	41	N-105°-E	
SK-199	P-42・43	橢円形	113	75	28	N-77°-E	
SK-211	Q-43	橢円形	148	92	46	N-76°-E	
SK-222	Q-43	橢円形	158	96	56	N-78°-E	
SK-223	Q-44	橢円形	152	97	69	N-78°-E	ベンガラ(西)
SK-224	P-43・44	橢円形	117	71	32	N-96°-E	
SK-225	Q-44	橢円形	104	53	26	N-70°-E	
SK-226	O-43・44	橢円形	118	68	27	N-85°-E	
SK-230	Q-43	橢円形	115	67	25	N-73°-E	
SK-249	K・L-45	橢円形	140	80	40	N-92°-E	
SK-705	L-45・46	橢円形	125	75	45	N-58°-E	ヒスイ1
SK-707	M-45	橢円形	140	90	35	N-75°-E	
SK-708	M-46	橢円形	110	55	10	N-76°-E	
SK-710	Q-48	橢円形?	150	—	40	N-106°-E	浅鉢1(大洞C2)
SK-712	N-44	橢円形?	130	85	30	N-94°-E	漆製品(紐状)
SK-713	N-44	橢円形	130	75	25	N-99°-E	漆製品(リング状:耳飾り)
SK-715	P-48	橢円形?	145	—	10	N-93°-E	漆製品(紐状)、壺2・鉢2(大洞C2)

土坑番号	位 置	形 態	規 模 (cm)			長 軸 方 位	備 考
			長軸	短軸	深さ		
SK-716	P-45	楕円形	120	65	10	N-60°-E	
SK-731	H・I-56	楕円形	135	90	45	N-154°-E	ベンガラ（南東）
SK-733	H・I-55	楕円形	160	100	55	N-63°-E	ベンガラ（東）、底面両端に溝
SK-735	I-55	楕円形	115	65	15	N-4°-E	ベンガラ（全体）
SK-738	K-55	楕円形	125	85	30	N-93°-E	ベンガラ（東と西）
SK-739	J-55	楕円形	130	85	35	N-71°-E	ベンガラ（東）
SK-745	K-54	楕円形	135	70	40	N-70°-E	
SK-804A	O-58	楕円形	—	80	20	N-43°-E	
SK-807	O-56	楕円形	120	75	55	N-72°-E	ベンガラ（西）
SK-809	Q-47	楕円形	120	—	15	N-117°-E	
SK-810	R-47	楕円形	104	—	15	N-114°-E	
SK-811	P-44・45	楕円形	160	110	45	N-57°-E	漆製品（藍胎漆器2）、ヒスイ2
SK-812	Q-47	楕円形	155	80	20	N-95°-E	ベンガラ（東）
SK-814	P-47・48	楕円形	135	70	25	N-93°-E	漆製品（藍胎漆器）、ヒスイ2、石英赤鉄鉱7
SK-815	P-47	楕円形	120	80	30	N-105°-E	漆製品（リング状他）
SK-816	M-45	不明	—	—	20	—	漆製品（紐状）
SK-817	R-47	楕円形	115	60	15	N-32°-E	漆製品（紐状）
SK-818	R-46	楕円形	125	70	40	N-89°-E	漆製品（リング状：耳飾り）
SK-819	O・R-46	不明	—	—	25	—	漆製品（紐状）
SK-820	N-45	楕円形	120	60	25	N-88°-E	
SK-831	Q-46	楕円形	110	75	20	N-116°-E	漆製品（リング状他）
SK-832	P-44	楕円形	150	80	40	N-100°-E	漆製品（リング状他）、ヒスイ3
SK-833	P-47	楕円形	(155)	60	15	N-125°-E	漆製品（藍胎漆器）南東部掘りすぎ？
SK-834	Q-45	不明	—	—	25	N-46°-E	漆製品（藍胎漆器）
SK-837	Q-44	楕円形	90	60	25	N-99°-E	漆製品（紐状）
SK-842	Q-45	楕円形	130	65	50	N-83°-E	漆製品（紐状：首飾り）
SK-844	Q・R-45	楕円形	90	70	15	N-47°-E	
SK-846	Q-45	楕円形	130	80	25	N-51°-E	漆製品（藍胎漆器・リング状他）
SK-847	Q・R-47	楕円形	105	50	20	N-112°-E	漆製品（紐状）
SK-848	Q・R-47	隅丸長方形	155	95	15	N-116°-E	漆製品（紐状）
SK-850	P-44・45	不明	—	65	30	N-14°-E	
SK-851	P・Q-47	楕円形	90	60	25	N-87°-E	漆製品（藍胎漆器）、ヒスイ2
SK-864	Q-46	楕円形	145	75	25	N-75°-E	漆製品（藍胎漆器）、ヒスイ4、石鏃1
SK-865	Q-47	不明	—	65	15	N-65°-E	漆製品（紐状）、ヒスイ3
SK-871	K-52	楕円形	110	75	25	N-132°-E	ベンガラ（北）、緑色凝灰岩平玉52
SK-878	O-44	楕円形	140	90	30	N-67°-E	礫1
SK-880	I-52	楕円形	100	55	30	N-83°-E	ベンガラ（東）、小石3
SK-886	M-46・47	楕円形	90	65	25	N-103°-E	
SK-891	L-46	楕円形	105	70	30	N-91°-E	ヒスイ3
SK-893	K・L-50	楕円形	125	70	45	N-93°-E	
SK-894	J-46	楕円形	135	75	25	N-96°-E	
SK-897	I-47	楕円形	150	85	40	N-83°-E	
SK-900	L-47	楕円形	130	80	30	N-93°-E	ベンガラ（東）
SK-902	J-46	楕円形	130	75	15	N-113°-E	
SK-903	J-45・46	楕円形	95	75	15	N-95°-E	
SK-904	K-46	楕円形	125	60	15	N-97°-E	漆製品（紐状）、ヒスイ4
SK-905	M-49	楕円形	110	70	35	N-61°-E	
SK-907	L-48・49	楕円形	140	95	40	N-88°-E	漆製品（紐状）
SK-908	J・K-47	楕円形	95	60	15	N-86°-E	
SK-910	K-47・48	隅丸長方形	90	60	20	N-101°-E	ベンガラ（東）、ヒスイ6
SK-912	H-52・53	楕円形	135	60	15	N-31°-E	ベンガラ（北）
SK-914	J-52	楕円形	130	65	25	N-51°-E	ベンガラ（中央）
SK-915	J-52	楕円形	125	85	50	N-113°-E	ベンガラ（東）
SK-916	J-53	楕円形	120	70	45	N-148°-E	ベンガラ（南）